

家族で英語を学ぼう！



幼い子どもたちのための
異言語としての英語学習法





幼い子どもたちのための 異言語としての英語学習法

幼い子どもたちはごく自然に言葉を学習していきます。青年期の若者や大人たちと違って、意識的に学ぶ努力をしなくても自発的に言葉を覚えてしまうからです。子どもたちは、発音をまね、自ら法則を考え出す能力もっています。大きくなってから文法重視の教科書を使って学術英語を学んだ大人たちから聞かされないかぎり、「英語を話せるようになるのは難しい」などという考えが心に浮かぶことはないのです。

早く始めるメリット

- 幼い子どもたちはまだ日本語（母語）を学んでいる段階にあります。その際に先天的な独自の言語学習法を使いますが、その方法を、英語を覚えるときにも活用できることにすぐに気づくのです。
- 幼い子どもたちは遊び感覚の練習を通じて英語を学んでいきます。大人と一緒に練習に参加するなかで言葉を身につけるのです。まずは練習の意味を理解し、次に大人たちの発する言葉の意味を理解していきます。
- 幼い子どもたちには、日々の予定に英語を組み込む時間がたっぷりあります。学校の授業はまだ簡単なものですし、子どもたちの頭の中も、暗唱したりテストに備えたりすることでいっぱいになってはいない分、余裕があります。宿題もほとんど、あるいはまったくなくてしょうし、人より遅れてはならないというストレスも少ないでしょう。

- 幼くして第二言語を習得する機会があった子どもたちは、その後他の言葉を学ぶ際も、幼いころに養った言語学習法を生涯使い続けるようです。3番目、4番目、またはそれ以上の言葉を習得するのは、2番目のときよりも簡単です。
- 年長の子どもたちや大人たちのように言葉を意識して学ぶのではなく、「吸収」する幼い子どもたちは、良い発音が身につくやすく、言葉や文化を感覚的に理解しやすくなります。一言語だけを話す子どもたちが思春期を迎え、強い自意識が芽生えたときには、言葉を習得する能力は衰えていて、文法重視の授業で意識的に英語を学ばなければならないと感じます。このような変化がどの年齢で起こるかは、子どもたちひとりひとりの発達レベルや社会から寄せられる期待によって大いに違ってきます。



英語習得の段階

話し言葉は、一般に読み書きよりも先に習得されます。

● 沈黙期

乳児が日本語を学ぶとき、「沈黙期」とよばれる段階が存在します。言葉話し始める前に、目と耳をはたらかせ、顔の表情やジェスチャーでコミュニケーションをとることができる時期のことです。幼い子どもたちが英語を学ぶときにも、実際に英単語を口に出す前にコミュニケーションと理解が成立する、同じような「沈黙期」があります。

この間、親は子どもに単語を繰り返させて無理やり会話に参加させる必要はありません。会話は一方通行でよいのです。このとき、子どもは大人が話していることから言葉を習得しているからです。大人が「幼児語」（幼い子どもたちに合わせた話し方）を使ってやれば、子どもは日本語を学ぶ際と同じ方法を利用して学習を進めることができます。

● 話し始める

英語学習の頻度にもよりますが、しばらくすると、子どもたちはそれぞれ（たいてい女の子は男の子より早く）、単語（「cat(ねこ)」「house(おうち)」）やお決まりのフレーズ（「What's that?(あれはなに?)」「It's my book(それはわたしの本).」「I can't(できない).」「That's a car(あれはくるま).」「Time to go home(かえらなきゃ).」）を、会話の中や唐突な発言として口に出すようになります。子どもはこのような語句を丸暗記しており、複数の単語で成り立っていても気づかずにそっくり発音をまねています。この段階はもうしばらく続きます。自分なりの表現を作れるようになるまでの間、会話に参加するための手っ取り早い方法としてさまざまな語句を口にしながら、さらに言葉を身につけていくのです。





- 英語を組み立てる

子どもたちは徐々に一連の語句を組み立てはじめます。たとえば、記憶しているひとつの単語に自分の語彙の中から単語を付け加えたり（「a dog (犬)」→「a brown dog(茶色い犬)」→「a brown and black dog (茶色と黒の犬)」）、記憶している言い回しに自分の考えを付け加えたりします（「That's my chair (あれはわたしのいす)」 「Time to play(あそぶじかんだ)」）。英語に触れる頻度や経験の質にもよりますが、少しずつ完全な文章を作り出しはじめるのです。

理解すること

理解することは話すことよりも重要です。幼い子どもたちは思っているよりも優れた理解力を持っているものです。子どもたちは文脈からさまざまな手がかりを得て日本語を理解することに慣れていきます。耳にする日本語のすべてを理解しているわけではないかもしれませんが、要点をとらえています。つまり、いくつかの重要な単語を理解すると、別のヒントを用いて残りの部分を読み取り、全体の意味を理解するのです。励ましてあげれば、子どもたちはすぐにその要点を理解する力を応用し、英語の意味も解釈できるようになるのです。

いら立ち

最初は珍しかった英語学習も、ある時期を過ぎると、特に男の子の中には英語で自分の考えを思うように表現できないいら立ちを感じ始める子が出てきます。英語でも日本語で話すのと同じようにペラペラ話したい、と思い始める子どもも現れます。このようなイライラは、「I can count to 12 in English(ぼくは英語で12まで数えられる)」といった達成感を表す表現や、お決まりの語句から成る、リズム間のある簡単な詩を言わせたりすれば、たいてい克服できます。



間違い

子どもたちの間違いを指摘してはいけません。訂正すれば瞬時にやる気を削いでしまうからです。子どもたちの間違いは、英文法の勘違いもあるでしょうし、単なる発音の間違いかもしれません。「I goed(ぼくは行った)」も、大人が「Yes, you went (そうね、あなたは行ったのね)」と返してやればすぐに「went(gol行く)の正しい過去形)」になりますし、「zee bus(ズイ バス)」と聞こえても大人が「the bus(ザ バス[the の正しい発音])」と繰り返してやればよいのです。日本語を身につけるとき同様、同じ言葉を大人が正しく繰り返すのを聞けば、子どもたちはそのうち自分の力で誤りを正してゆくものです。

性別による違い

男の子の脳の発育の仕方は、女の子とは異なります。この違いが、男の子の言葉の習得や使い方に影響を及ぼします。男女混合の教室では、言葉を使うことにかけては天性の能力を持つ女の子に圧倒され、男の子の影が薄れてしまうこともあるでしょう。男の子の潜在能力をひきだすには女の子の場合とは異なる言語体験が必要であり、学習成果を女の子と比較してはいけません。



言語学習環境

幼い子どもたちにとって、英語を習得するのは難しいものです。そこで大人が「幼児語」のテクニックを使ってサポートし、上手く経験を積んでいけるように環境を整える必要があります。

- 幼い子どもたちが安心できる環境を作り、英語を使うには明確な理由があることを教えなければなりません。
- 練習は、興味をそそり、子どもたちになじみのある毎日の活動と結びつけたものでなければなりません。たとえば、英語の絵本を読む、英語で詩を読んでみる、英語のお菓子を食べる、などです。
- 練習の最中は、いま何をしているのかがわかるよう大人が解説を加え、状況によっては「幼児語」を使って対話をします。
- 英語学習は、子どもたちがすでに日本語で理解している事柄に的を絞り、面白くて興味を持てるものに焦点を当てます。そうすれば、子どもたちは新たな考え方と新たな言葉、という二つの事を学ぶ必要はありません。すでに知っていることを話すために英語を学ぶだけですむのです。
- 練習は、可能なかぎり、何か具体的な人やものを例に用いてすすめます。理解に役立ち、好奇心が増すからです。



読解

すでに日本語を読むことができる子どもたちは、一般的に英語を読む方法を知りたいがるものです。しかし日本語で書かれた言葉を読み取って文章の意味を理解する方法を知っていますから、英語を読んで理解する方法を教えてもらわなければ、日本語を読み取る手法を当てはめてしまい、日本語のアクセントで英語を読むようになってしまいます。

英語を読んで理解するためには、アルファベット26文字の名前と音を知る必要があります。また、英語ではアルファベットは26文字ですが、音は平均44もあるので（標準の英語で）、残りの音については、言葉を使ったり読んだりする経験をもう少し積んでから教えたほうがよいでしょう。

読もうとしている言葉、つまり英語をすでに知っていれば、幼い子どもたちはすぐに英語を読み始めます。大人と一緒に絵本を読んだりリズム感のある詩を教えてもらったりした経験があれば、そうした言い回しを記憶しているので、多くの子どもは自分で英語を読む方法を自然に見つけだします。記憶している言葉を読んで理解することは、読み方の学習において重要な段階です。この段階で、子どもは自分で簡単な言葉を読んで理解する方法を学ぶからです。読める言葉がひとつおりの蓄積されれば、子どもたちには自信が芽生え、さらに体系的なアプローチへと駒をすすめる準備が整うのです。



親のサポート

子どもたちにその上達ぶりを伝えてあげるとよいでしょう。どんな成果もやる気につながりますから、絶えず励まし、うまくできたときは褒めてやる必要があります。親は、たとえ自分たちの英語力も初歩的で、子どもと一緒に学んでいたとしても、子どものやる気を引き出して学習を助けることができる理想的な存在です。

親がともに学ぶことで、家庭で英語を話したり、英語の練習を行ったりすることができるだけでなく、言葉の学習や異文化に対する子どもの姿勢に影響を与えることもできます。このような物事への姿勢のほとんどは8歳から9歳までに形成され、生涯変わることはないと考えられています。

さらに詳しくは、www.britishcouncil.org/parentsにアクセスしてください。





www.britishcouncil.org/parents

このブックレット・シリーズは親をサポートするためにブリティッシュ・カウンシルより委託製作されたものです。

Opal Dunn 著 (作家・教育コンサルタント/英国)

© British Council 2008

ブリティッシュ・カウンシルは英国の公的な国際文化交流機関です。英国では公益団体 (非営利組織) として登録されています。

公益団体番号: 209131 (イングランド、ウェールズ)、SC037733 (スコットランド)